

『紅毛通用番話』について

内田慶市

「紅毛」という言葉は日本語の中にも見られる。すなわち、江戸時代、長崎にやって来たオランダ人を指す言葉であるが、転じてヨーロッパ人の総称でもある。日本語ではほかに「紅夷」あるいは「紅毛船」などという言葉も存在している。中国語においてもしかりであるが、「番話」も同じく、日中両国に見られる。なお、「番」は「蕃」とも書かれる。

本書の表紙（復旦大学の周振鶴氏より複写が提供された）に掲げられている絵は、おそらくオランダ人かポルトガル人であろうが、日本の長崎などの見られる絵と共通している部分が多い。特に、ステッキを持っているのがその特徴のようである。

さて、本書は中国人のための最も早い時期の英語教科書であるが、広東音をもとに漢字での音註がなされている。たとえば、以下の通りである。

- 一 温 (one)、二 都 (two)、三 地理 (three)、四 科 (four)、五 輝 (five)
- 六 昔士 (six)、七 心 (seven)、二十 敦地 (twenty)、二十一 敦地温 (twenty one)
- 女 家兒 (girl)、女性 烏文 (women)、
- 行く 哥 (go)

このように、全部で 401 個の語あるいは文が収められており、この形はその後の Robert Thom の『華英通用雑話』などに受け継がれていくことになる。

本書の内容や収録語に関しては、周振鶴 1998 や呉義雄 2001 に詳しいが、ここでは一点だけ述べておく。それは「ピジン (Pidgin English)」あるいは「洋濱英語」に関することである。

周氏や呉氏だけでなく、総じてこれまでの「ピジン」に言及する論考においては、上記のような語や文を「ピジン」の範疇に入れてきている。しかしながら、これらを「ピジン」とすれば、次のようなものも当然「ピジン」ということになる。



異版の表紙

可口可樂 的士 巴士 麥當勞 肯德基

すなわち、音訳語と「ピジン」の区別がなくなってくることになる。「音訳」が「ピジン」とすれば、日本語のカタカナ語もまた「ピジン」と呼んでもいいだろう。もちろん、そういう見方もあり得るが、筆者はその立場は取らない。筆者は「ピジン」の範囲を限定すべきだと考えている。たとえば、以下のようなものはピジンと言って良いだろう。

Taksan years ago, skoshi Cinderella-san lived in hoouchie with sisters.

(ずっと昔、小さなシンデレラは、姉妹といっしょに家に住んでいました) (田中春美他『言語学のすすめ』大修館書店 1978, p.161)

あるいは、『英語註解』(1860)に見られるような以下のような文である。

I no see you.

You want how much.

You go what time.

You no wait.

I no can make law.

No want forget.

No can inter city.

Other man not know.

You what time come here.

I at that place make partner.

I with you settle count.

You just now very good chance.

Tomorrow no have time.

このように、「ピジン」とは言語接触により生まれ、「限られた語彙・音韻」と母国語の文法の影響を受けた、相手方の言語の規範的な文法、構文を単純化したものと考えられる。もちろん、「ピジン」にも一定程度の規則性はあり、上の例で見れば、「在=at」「要=want」「不、没=no」「與=with」といった決まった対応関係であり、時制や形態変化を無視するといった「規則性」はあるのである。いずれにせよ、このような資料を基に「ピジン」の問題を掘り下げていくのも面白いことである。

#### 参考文献

Hunter, W.C. *The 'Fan Kwae' at Canton before Treaty days 1825-1844*, Paris, 1882.

周振鶴 1998 『紅毛番話』 索解 『逸言殊語』 浙江攝影出版社

呉義雄 2001 「廣州英語與 19 世紀中葉以前的中西交往」 『近代史研究 3』 総第 123 期

内田慶市 2002 「近代日中欧言語文化接触に関わる一つの現象——19 世紀中国における英語学習」 『福建と日本』 (関西大学東西学術研究所国際共同研究シリーズ 4) 関西大学出版部